

碩叢学園在り

Vol. 105
2005.4.15

RAKUNO GAKUEN



「牛たちから卒業生へ感謝のしるし〜バイオガス発電で発生する温水で露天風呂〜」

Green Stage

聖句

あなたの耳は、背後から語られる言葉を聞く。「これが行くべき道だ、ここを歩け。右に行け、左に行け」と。(旧約聖書イザヤ書 30章21節)
解説：青春は迷いの時期だ。しかしその迷いの中でしか人は自分自身の道を発見することはできない。

学長就任あいさつ



大学・短大連携のもと独自の役割を生かして

— 他大学に無い特徴を強みに —

酪農学園大学・短期大学部 学長

大谷 俊昭

本年3月をもって4年間の学長任期が満了となりました。この間に寄せられたご支援・ご鞭撻^{べんたつ}に対して心より感謝申し上げます。引き続き2期目（2年間）を勤めることになりました。これまでも増して、力をお貸しいただけるようお願い致します。

学部再編で建学の精神の具現化を

この4年間は、「大学に冬の時代到来」という言葉が具体的な現実として突きつけられた時期でありました。就学人口の激減、国立大学の独法化、大学に対する社会的評価の厳格化などが進行し、各大学は存続の危機にさらされています。全国の大学の3割が定員を割っている中で、本学は今まで何とか定員を割らずに学生を確保してきましたが、学科によっては極めて苦しい状況が続いています。このような状況を打破するために、環境システム学部を再編し、従来の2学科構成から環境マネジメント学科・地域環境学科・生命環境学科の3学科構成となります。この再編は単に学生確保対策ではなく、本学の建学の精神「健土健民」の具現化の道でもあります。健土健民の思想は、酪農・農業の内部にとどまるものではなく、産業・市民の社会

思想として定着させなければなりません。そうでなければ、農業における健土健民思想の普及にも限界があります。環境との調和に関する課題は、酪農学部・獣医学部においても取り組まれておりますが、環境システム学部が専門的に担わなければならないほど大きいといえます。この学部が総合的に環境問題をとらえるために、自然科学的領域の補強を中心とした再編に至ったわけです。新しい生命環境学科は自然科学系の学科ですが、他の2学科においても社会科学・人文科学に自然科学を加えて、総合的に環境問題を扱える専門家を輩出することを目標としています。再編された環境システム学部は、今春第1期生を迎えます。これからの4年間にどのような人物を送り出し、社会的評価が高められるかが問われます。皆さまの厚いご支援をお願い致します。

特徴を把握し、大学のあり方を追求

本学は、全国的に見ればそれほど規模の大きい大学ではありません。言うまでもなく、ここでいう規模は面積ではありません。このような大学が危機を乗り越え発展するためには、他大学に無い特徴を把握し、これを強みとして方向

を考えることを基本姿勢とするべきであります。第一の特徴は、建学の精神が他大学に比べて抜きんでて明瞭であり、社会的な意味をもつことでもあります。一時的に受験生の人気を求めるということではなく、今世紀の社会が求める方向と領域に視座を置いた大学のあり方を追求するという事です。環境システム学部再編の意味については既に述べた通りですが、大学全体としても研究・教育の方向性について、この視点から追求する必要があります。普及活動・生涯教育・国際交流などにも同じことがいえます。第二の特徴は、教育界や流通業界も含めた農業関連分野で、多くの卒業生が中心的担い手になっていることです。地域や産業との連携を強めることは、他大学より容易であり、その効果も大きいといえます。

2期目は、短大学長を兼任します。短大の定員は少ないのですが、大学との連携のもとに独自の役割を生かしていきたいと考えています。この2年間は、過去4年間を継続する任務と、将来につなげるという任務を組み合わせる必要があります。難しい時期ですが全力を尽くします。

キャンパスレポート

1,348人の門出を祝う 2004年度 卒業式

酪農学園大学・大学院および酪農学園大学短期大学部の2004年度学位記授与式ならびに卒業証書授与式が3月16日、本学体育館で行なわれ、多くの教職員や父母らが見守る中、華やかな服装に身を包んだ卒業生977名は、晴やかな表情で式に臨みました。

式辞に立った大谷俊昭大学学長は「一人ひとり、自分にとっての学位記の意味をかみしめ、競争原理が浸透した社会でも調和や共生とい



う良識を大切にしてほしい」と述べ、続く安宅一夫短大部学長（当時）は「先輩には牛飼い、草作りの名人、目立たずとも地上の星として輝いている人が大勢います。皆さんもそれに続いてほしい」と卒業生を激励。最後に平尾和義理事長が「今後の生き方を選び知性と、本学で学んだ自信と誇りを持ち、持って生まれた素質をさらに磨きあげてほしい」とあいさつしました。

卒業生代表の農業経済学科竹永拓正さんは「ここで出会った友達は一生の財産です。くじけそうになった時は友と語った夢をバネに努力していきましょう」と証詞を述べました。

とわの森三愛高等学校の2004年度卒業証書授与式は3月1日、本校礼拝堂で行なわれ、371名が共に過ごした学びやをあとにしました。

式辞で村山昭二校長は「群集から

飛び出し、顔の見える生き方をしてほしい。また思いやりと共同の社会の担い手となってほしい。それが本校で学んだ建学の理念でもあります」と呼びかけました。

卒業生代表の酪農経営科の田原良輔さんが「仲間や先輩・後輩、先生など多くの人との出会いが不安や戸惑いを少しずつ取り除いてくれたと同時に、期待は自信・希望へと成長させてくれました」と別れの言葉を述べました。

なお、英語科は2004年度で廃止のため、3科そろっての卒業式は今年が最後となりました。



<http://www.rakuno.ac.jp/news/200503/news39.html>

夢実現の新たなステージ 2005年度 入学式

酪農学園大学・大学院ならびに同短期大学部の入学式が4月6日、本学体育館で行なわれました。当日は晴天にも恵まれ、在学生たちのサークル勧誘が出迎える中、新入生990名（大学900名、大学院34名、短大56名）は緊張した面持ちで式に臨みました。

式は礼拝形式で行なわれ、式辞に立った大谷俊昭学長は、「果てることのない戦乱や飢えの時代を迎え、周囲の国々にも対立感が高まっている社会状況に対し、本学の



建学の精神である『三愛精神』と『健土健民』は一石を投じるものです。在学中自分の勉強していることの意味をよく考え、卒業したならばこのような考え方を主張する使命があります」と述べました。

平尾和義理事長は「入学時の緊張と気持ちを忘れず、それぞれ専門領域の学的研さんに意欲を持って取り組んでほしい。本学の個性は大学全構成員が一体になってこそ発揮されるものです。皆さんにも一日も早く本学との深い情緒的かわりを持ってほしい」と呼びかけました。

とわの森三愛高等学校の入学式は4月8日、本校礼拝堂で行なわれました。あいにくの曇り空でしたが、389名（普通科349名、酪農経営科40名）の新入生は期待と希望で胸をふくらませ、高校生活をスタートさせました。

各担任が新入生一人一人を点呼



し、村山昭二校長より入学許可が宣言されました。その後村山校長が「本校における3年間の高校生活が皆さんの人生にとって意味あることとなりますよう、心から祈っています」と式辞を述べ、続いて平尾理事長、尾崎邦嗣PTA代表がそれぞれあいさつをしました。

最後に新入生代表の諸澤勇太さんが「新しい環境の中での新しい出会いを通じ、お互いを尊重し合い、切磋琢磨する気持ちをさらに培っていきたいです」と力強い言葉で決意を述べました。

<http://www.rakuno.ac.jp/news/200504/news01.html>

学園トピックス



大学・大学院・短期大学部

浜中町と地域総合 交流協定を締結

酪農学園大学および同短期大学部は2月24日、本学において、釧路管内浜中町と相互に連携して地域振興と人材育成を図ろうと、地域総合交流協定を締結しました。

締結式には大谷俊昭大学学長、安宅一夫短大部学長(当時)、長谷川徳幸浜中町長、JA浜中町の石橋栄紀組合長が出席。①大学は浜中町の産業・文化・生活・教育等の振興と発展に協力する②町は大学・短大の教育・研究の振興と発展に協力する一など3項目の協定に調印しました。

大谷学長は「今回の協定を一つのモデルとして内容的に充実させていきたい」、安宅短大部学長は「それぞれの立場で努力し、協力して希望に向かっていきたい」と両学長とも今後の両者の発展に意欲を見せました。



地環、アウトドア資格の 人材育成機関に

環境システム学部地域環境学科が1月25日、「北海道アウトドア資格制度人材育成機関(基礎分野)」として登録されました。

この資格制度は、北海道が2002年度から設置し、基礎分野試験(筆記)に合格および自然・山岳・カヌー・ラフティング・トレイル

ライディングの5分野の専門分野試験(筆記・実技)の合格により、それぞれのガイド資格を得ることができる制度です。今回、地域環境学科がその人材育成機関に登録されたことで、指定された9科目の単位を修得すれば基礎分野試験が一定期間免除されます。

なお、2005年度新入生より対応となります。

<http://www.rakuno.ac.jp/news/200502/news34.html>

食流・五戸さん 作文「私の提言」で入選

(社)消費者関連専門家会議(ACAP)が募集していた「消費者問題に関する『わたしの提言』」で、食品流通学科3年(現在4年)の五戸紅美子さん(青森明の星高校卒)の「私が考える“消費者の自立”支援策」がこのほど佳作に入選しました。

この提言は、同会議が消費者問題に関する啓発や教育助成の一環として行なっているもので、五戸さんが獲得した佳作は、応募数102編のうち第3位にあたります。

五戸さんは「アンケートに基づいて消費者の権利をしっかりと主張できたところが評価されたのではないかと思います」と話していました。

<http://www.rakuno.ac.jp/news/200503/news35.html>

2004年度課外活動表彰(第2回)

少林寺拳法部 2004年少林寺拳法全国大会

アーチェリー部 第29回北海道学生アーチェリー秋季インドア大会
正道空手部 第18回全日本学生空手道選手権大会

若生 怜奈	一般女子二段の部	第3位
久保 宏行	男子	優勝
原田 敢	軽量級	優勝
松本 徹	軽量級	第3位
橋本 悠平	中量級	優勝
上原恒一郎	中量級	第2位
手嶋 朋子	女子クラス	第3位

第6回ウェイト制オープントーナメント
全日本空手道選手権大会2004

梁川 正重 第59回国民体育大会秋季大会 馬術競技 成年男子トップスコア競技 第2位

獣医・村上さん 発明の権利を学園に譲渡

2004年度の卒業論文研究より、初めての特許出願が行なわれました。



出願したのは、獣医学科6年(当時)の村上正紘さん(大阪・追手門学院高校卒)の研究「心拍変動解析を用いた犬の自律神経機能評価法」の中で用いた「動物の生体情報モニタ用固定具および動物の生体情報モニタ方法」。これは、研究を進める上で必要になり村上さんが考案・製作した、犬の長時間心電図を取る際にその装置を体に固定させる服で、剃毛の必要がなく、犬が感じるストレスがどの程度かも分かるというもの。このほど、村上さんはこの発明の権利を学園に無償譲渡し、それに対して学長より感謝状が贈られました。「臨床現場で応用できるようなものにするのが目標。今後も大学と協力して研究を続けていければ」と話す村上さんは、獣医学に革新を起こすような獣医師を目指したいと、意欲を見せました。

2004年度 酪農学部懸賞論文

最優秀賞	食品科学科3年	鈴木 寿代
優秀賞	農業経済学科4年	瘡師 翼
	食品科学科1年	川島 英勝
佳作	食品科学科4年	小川 美
	酪農学科3年	畦地 若菜
	食品科学科1年	長岡 由希子

(学年は発表当時のもの)

<http://www.rakuno.ac.jp/news/200501/news32.html>



とわの森三愛高等学校

酪農研修旅行 日・EU交流年認定事業に

2005年は「日・EU市民交流年」と定められており、このほど酪農経営科の今年度（21回目）のデンマーク酪農研修旅行が、日・EU市民交流年デンマーク事業促進委員会より「2005年日・EU市民交流年イベント」として認定されました。

研修旅行では、酪農家にファームステイをするなど、現地の人との交流がさかに行なわれており、また今年6月には、生徒が実習でお世話になったデンマーク酪農家の方々を本校に招待する予定で、交流年としてますますふさわしい一年となることが期待されます。

<http://www.rakuno.ac.jp/news/200501/news31.html>

酪農経営科卒業生が 後輩に授業

酪農経営科1、2年生の畜産の授業（内生藏啓貢教諭）で、同科卒業生による特別授業が、2月8～9日の2日間にわたって行なわれました。

講師は、2001年3月に卒業した、酪農学園大学酪農学科4年（当時）の中田孝貴さん。日ごろ内生藏教諭が「これからの酪農は、餌と代謝がわからなければ成功しない」と生徒に話していることと、中田さんの卒業論文の内容が共通するということで実現しました。

「高泌乳牛群の飼養管理」について行なわれた授業を真剣に聞いていた2年生（当時）の二瓶稔弘さんは「餌について調べているところだったし、将来、酪農を継ぐ時のためにも勉強になった」と話していました。

春季選抜全国大会 出場報告

バドミントン部

3月25日から27日まで、愛媛県松山市で行なわれた全国高等学校選抜バドミントン選手権大会に出場してきました。

八木麻由加選手の結果は、東海地区チャンピオンの名古屋経済大学市邨高等学校の選手と対戦し、5-11・8-11で1回戦敗退となりました。全国大会の雰囲気には圧倒され、緊張のあまり自分の力を十分に発揮することができず、悔いの残る試合となってしまいました。

この経験を生かし、夏のインターハイにつなげていきたいと思えます。たくさんの応援、ご支援ありがとうございました。

この経験を生かし、夏のインターハイにつなげていきたいと思えます。たくさんの応援、ご支援ありがとうございました。



ソフトボール部

全国高等学校女子ソフトボール選抜大会 1回戦（延長11回）

6対5 県立滑川高校【富山】
2回戦

3対4 木更津総合高校【千葉】
1回戦は打撃の不調が原因で勝つ。2回戦では守備の乱れからの失点で、粘りを見せたものの惨敗に終わりました。選手・卒業生等の多くの関係者が期待していた「悲願達成」ができず残念に思います。投手・守備力は全国レベルにありながらも、今回は投手を含めた守備の乱れと攻撃面（打撃）での決定力・集中力が不足していま

した。しかし昨年の王者（木更津総合高校）を苦しめた粘りは、収穫の一つでありました。今後、技術面でのレベルアップはもちろんのこと、強い精神力を培い、夏のインターハイに向けて、日々の練習に取り組みたいと考えています。

物心両面にわたりご支援・応援いただいた関係者の皆さまに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。



男子バレーボール部

男子バレー部は、3月20日から東京の代々木体育館で開催された、第36回全国選抜優勝大会（春高バレー）に10年ぶりに出場しました。

1回戦は、大分県代表の別府鶴見丘高校と対戦し、第一セット24対26とあと一步のところまでセットを落としてしまいました。第二セットは、後半まで常にリードしていたのですが、終盤に持ち前の粘りを発揮することができず、21対25

でセットを落とし、ストレートで初戦敗退してしまいました。

これからもっと練習を重ね、今度は夏のインターハイで全国大会に出場できるよう、技術的にも精神的にも強くなりたいと思います。応援よろしくお祈いします。



活躍する同窓生 Vol.13



飼主さんの立場に立った病理診断を目指して



病理組織検査 ノースラボ

日本獣医病理専門医、アメリカ獣医病理診断医 **賀川 由美子** さん

大学 獣医学科 1994 (平成 6) 年卒業
大学院 博士課程 1998 (平成 10) 年修了

2004年10月に日本人で2人目のACVP(アメリカ獣医病理診断医)となった賀川由美子さんをお訪ねしました。

ACVP試験は、アメリカの獣医病理部門の専門医認定試験で、難易度が非常に高く、アメリカ獣医教育(大学4年卒業後さらに獣医学教育を4年)を受けた者でも3年間の専門医教育の後に2年から4年かかり、毎年30人ほどしか合格できない難関です。またアメリカでは、ACVP資格者は獣医病理の専門家として、各分野において大変重要な役割を担っています。

賀川さんは、1999年、独自に病理診断を専門に行なう業務を開始しますが、より高度な専門教育を受けるため、2003年12月にノースカロライナ州立大学に留学し、1年半後にACVPを取得しました。

現在は、札幌市内において、動物病院などから依頼された病理組織をアメリカで培った高いレベルの専門知識によって診断し、臨床獣医師や病気のペットを持った飼主の心強いアドバイザーとして活躍しています。

Q.ACVPを目指した理由は?

A. 臨床現場を知らない病理診断ではなく、開業医と協力して、臨床現場で問題になっているテーマをとりあげてみたいと考えました。そこで、久保拓也氏(本学獣医学科1991年卒)の協力を得て北愛動物病院(札幌市)内に間借りして、臨床診断をしながら、病理診断を始めたのですが、「自分の診断で間違いはないのか?」「我流で世界に通用するのか?」などと思い始めて、自分に自信が持てなくなりました。

日本には、専門医教育のプログラムがありませんが、アメリカにはあります。「アメリカだったらどのように診断するのか?アメリカの病理学をこの目で見てみたい」と思い渡米を決めました。最初からACVPを目指していたわけではなく、ノースカロライナ州立大学でDr.Meutenの下、専門医教育の3年目のコース

で学ぶことができ、そこからACVP受験への道が開け、多くの方々に支えられてACVP試験に合格することができたのです。

Q.アメリカの獣医学教育の感想を。

A. 学生たちの学ぶ姿勢が日本とは全く違っていました。アメリカでは、一般の大学(4年)卒業後に獣医教育をさらに4年間受けるのですが、その4年次には国家試験を受け獣医師として学習します。週2回は試験があり、夏休みなどの長期休暇中もアルバイトなどする暇もないほど熱心に勉強し、臨床獣医師を目指して研究・実習に没頭していました。

Q.将来の目標は?

A. 特に大きな事業をしたいとは考えていません。ただ研究としてではなく、臨床の現場から離れずに飼主さんの立場に立った病理診断をしていきたいと思っています。

病理診断をする時に、ペットの名前、動物の種類、年齢、性別などが付けられてくるのですが、「このコはまだ若いのに、この診断書を見たら飼主さんはショックだろうな」とか、つつい考えてしまいます。だから、病理組織診断をするだけでなく、それに付随する状況の説明など、飼主さんが読んで分かるように、また担当の獣医師も治療方針を立

てやすいような診断書になるように心がけています。

私のところに病理診断に来るものは、飼主さんにとっては悲しい現実になってしまうことが多いのですが、私の書いた診断書を受け取った時の飼主さんの気持ちを大切にしたいと思います。そのためには、「多分」「恐らく」などというあいまいな診断をすることのないようにしなければなりません。ACVPを取ったら何でも分かると思われるのですが、そんなことはなく、まだまだ知らないことがたくさんあります。もっともっと勉強しなければなりません。

Q.本学で影響を受けたことは?

A. 谷山弘行教授(獣医病理学教室)にお会いできたことで、私の価値観は大きく変わりました。

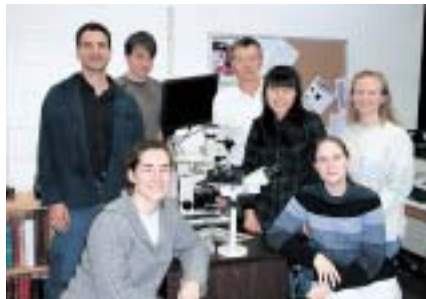
組織を診ることの楽しさ、やればやるほど面白くなる、やってもやっても終わりが無い、そして知らないことがたくさんあることを教えていただきました。

Q.在学生へメッセージを。

A. 一度日本の外に出て、外から日本の良いところ悪いところを見直す、そんな機会を持ってほしいですね。



プロフィール
1969年 4月6日生まれ。36歳。
1994年 獣医学科卒業
1998年 博士課程修了
1998年~1999年 酪農学園大学附属家畜病院研修医
1999年~2002年 病理組織検査 ノースラボ
2003年 ノースカロライナ州立大学留学
2004年10月 ACVP取得
京都府出身。
ニャー吉、モモ、シンラの3匹の猫と暮らす。



留学中の仲間たちと

同窓会だより

◆◆ 根室支部同窓会 ◆◆

酪農学園根室支部同窓会は1月15日、中標津町で平成16年度総会を開催しました。卒業教育講座では、高橋節郎同窓会連合会長が「学園の近況について」講演し、学園は今、時代にあった教育を展開するため施設の拡充や、学部の改組等を実施しており、ますます卒業生の協力の必要性を訴えました。

◆◆ 福島支部同窓会 ◆◆

福島県酪農学園同窓会は1月22日、郡山市ホテル・ラフィエで第5回通常総会を開催しました。高橋連合会長のあいさつに続き、報告事項、審議事項がすべて承認されました。総会終了後、獣医学科田村豊教授が『公衆衛生：最近の話題』について講演し、「医薬品残留」と「薬剤耐性菌」の国際および国内動向を紹介しました。懇親会が開かれ和やかな雰囲気の中で終了しました。



◆◆ 関東拡大役員会 ◆◆

関東同窓会の拡大役員会が静岡県伊東市で開催されました。今年度の事業活動および各支部の同窓会の活動計画、同窓会連合会活動との協調およびその推進等を話し合いました。本学より出席した安宅一夫短大長(当時)が「酪農学園の現状について」、名久井忠教授が「酪農実習の様変わり」について話されました。講演後、懇談交流会を行ないました。

◆◆ 獣医学科盛岡同窓会 ◆◆

獣医学科同窓会岩手支部同窓会を1月29日に開催しました。特に盛岡での入試と合わせ、本学より出張の中出哲也助教授ほか、多くの先生方を囲んで学内の現況説明、その後懇

親交流会を行ないました。

◆◆ 獣医学科福岡支部同窓会 ◆◆

平成17年の福岡三愛支部同窓会を1月28日、福岡市内で開催しました。出席した同窓生は4期卒業から昨年卒業の35期まで老若男女で、福岡県内全域から集合しました。本会は毎年同窓会を継続してきており、これまでの同窓会には毎回、多数の先生方が参加していただき、同窓生一同心より感謝するとともに、本学とのきずなを深める絶好の機会となっています。今後も先生方、同窓生みなさんの多数の参加を待っています。

◆◆ 短大Ⅱコース同窓会 ◆◆

酪農学園短期大学2部、酪農科2期生の同窓会が2004年1月30日、札幌市で開催されました。当日は36名の卒業生と原田勇、市川舜名誉教授が参加。それぞれ持ち寄ったアルバムや名刺、胸のバッジ等を眺めながら約40年前の寮生活(申命寮・北光寮)など、話は延々と続きました。



◆◆ 獣医学科11期同窓会 ◆◆

獣医学科11期生(昭和53年卒)は2月12日、兵庫県南あわじ市で27.5周年記念同期会を16名の参加者で開催しました。全国に散らばっている同級生がそれぞれの思いを胸に集まって一夜を共にし、人生を振り返り、そしてこれからの歩みを語り、変わらぬ互いのきずなを確認し合

い、またの再会を約し、盛会裏に終了しました。

◆◆ とわの森三愛高校14期生入会式 ◆◆

とわの森三愛高等学校同窓会14期生入会式が2月25日、本校礼拝堂で行なわれました。式では、中井保博高校連合同窓会長・機農会長よりご祝辞をいただいた後、卒業生を代表して学年代表幹事の村井拓斗君が「同窓会の一員として、これからもとわの森三愛高校の卒業生としての誇りを持って巣立ちます」と力強くあいさつをし、新たに371名が同窓会の会員となりました。



◆◆ 青森支部総会・研修会 ◆◆

2月26日、青森市で開催されました。本学より高橋連合会長と仙北富志和教授が出席しました。会長は少子化の時代であり学生、生徒の募集協力を要請され、仙北教授は「母校の看板を背負ってほしい」と講演されました。

◆◆ 熊本県まきば会同窓会 ◆◆

支部総会が3月4日、熊本市で開催されました。本学より高橋連合会長が出席し、大学では学部の改組等をし、新しい教育を展開しており、より一層の卒業生の協力を求めました。研修会では酪農にかかわる情報交換と交流会を行ない、有意義なひとときを過ごしました。

お知らせとお願い

☆これから開催される行事予定☆

◎同窓会連合会総会 2005年5月30日(月)札幌ガーデンパレスにて開催予定

◎近畿支部同窓会 2005年5月29日(日)ホテル南海にて開催予定

◎三愛女子高校22期卒同期会 2005年6月18日(土)札幌ガーデンパレスにて開催予定

◎第14回ホームカミングデー 白樺祭開催日 詳細は後日、ホームページで案内致します。

※住所変更された同窓生の方は、下記のいずれかの方法で同窓会事務局までご連絡ください。

TEL: 011-386-1196 FAX: 011-386-5987 E-mail: rg-dosok@rakuno.ac.jp

手紙・ハガキ: 〒069-8501 江別市文京台緑町582 酪農学園同窓会連合会事務局

白樺並木

貴農同志会だより

◎2005年度総会開催の予告

昨年(2004年)度の総会の決定として「酪農学園だよりVol.103」で既にお知らせしましたように、本年度から、これまでの新年交礼会と定例総会・懇親会を一本にして定例総会・交流会とすることになりました。本年度は9月15日(木)を予定しています。会員の皆さまには、おってご連絡を致しますが、予定くださされ、多数参加されますよう希望します。

◎最近の貴農同志会会員の入会

状況および原稿依頼について

ここ2、3年の新規入会会員数は、同志会設立10周年記念の2001年は9名、2002年は20名、2003年は23名の多数にのぼっています。

しかし一方で、亡くなられた方も多く、2001年は8名、2002年は9名、2003年は9名となっています。

酪農学園に奉職され、数々の貴重な足跡を残された同志の皆さまがお元気なうちに、少しでもその記録をお寄せいただき、次の「貴農第2号」発刊のために書き残しては、と考えています。幸い、既に発刊された「貴農」については、多くの会員や心ある方々から感謝と喜びの声が寄せられています。

◎会員の動静

同志会会員は規約により「酪農学園を退職した者」で、会費は3,000円の終身会費となっています。しかし現在、連絡の取れない方が多くいます。

連絡の取れている会員……………577名

住所不明会員……………98名
(2005年3月現在)

お手持ちの「貴農」を参考に、現住所がお分かりの方がいらっしゃいましたら、事務局までお知らせくださいますようお願い致します。

◎役員の変更

会の規定により、役員任期は2年となっており、本年は改選の年にあたります。

選考規定により、近く選考委員会を設置し、役員候補者の選考を行ない、総会で承認を求めることになっています。

選考委員にも、また役員候補者にも(自薦、他薦を問いません)ふるって立候補されるよう希望しています。

貴農同志会事務局

TEL:011-386-1212 FAX:011-386-4541
緊急時の連絡先:080-5585-1927(原田勇会長携帯)

2005年度学部・学科長、部・次長

酪農学研究科長	塩種 見池 徳夫	夫朗 弘行
獣医学研究科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
酪農学部長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
獣医学部長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
獣医学科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
環境システム学部長	中村 原 准	進一 男則
酪農学科長	小村 原 准	進一 男則
農業経済学科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
食品科学科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
食品流通学科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
環境マネジメント学科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
経営環境学科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
地域環境学科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
生命環境学科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
短期大学部酪農学科長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
教務部長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
教務部次長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
学生部長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
学生部次長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
入試部長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
入試部次長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
就職部長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
就職部次長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
図書館長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
図書館副館長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
農場長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
農場次長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
家畜病院長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
エクステンションセンター所長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
エクステンションセンター次長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
エクステンションセンター次長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行
教職センター長	岡谷 本山 弘	哲全 敏行

人の動き

2005年3月31日発令 [退職・退任]

酪農学園大学
(1) 定年退職
大谷 俊昭 (教授) 尾崎 勝子 (課長) 岡田 富子 (看護師)
(2) 依願退職
柳村 俊介 (教授)
(3) 嘱託退任
黒澤 誠治 (教授) J.D.ウィリアムス (助教)
植村 なお子 (助手) 阿久津 敦子 (助手)
平野 敦 (技師)

とわの森三愛高等学校
(1) 依願退職
越後 久美子 (教諭)
(2) 嘱託退任
小野 慎弘 (教諭) 西川 求 (教諭)
学園事務局
(1) 定年退職
澤田 憲宏 (局長)
(2) 依願退職
袖野 道子 (主任主事)

2005年4月1日発令 [新規採用]

酪農学園大学
(1) 新規採用
農業経済 村 泰 彦 (講師) 吉保 達 (講師) 山 林 下 亜紀 (講師) 獣 医 英 明 (助手) 獣 医 松 田 川 直 哉 (助手) 学 事 課 立 野 直 子 (主事補) 学 生 課 菅 野 昌 弘 (主事補) 学 生 課 越 野 禎 (看護師)

(2) 嘱託新任
獣 医 N.L.ケネディ (教授) 生命環境 大 泰 司 紀 之 男 (教授) 生命環境 神 谷 正 敏 (教授) 生命環境 播 磨 山 敏 明 (教授) 地域環境 横 山 光 光 (教授) 酪 農 D.アンダーソン (助教) 食品科学 一 戸 由 美 (助手) 食品科学 大 星 武 野 (助手) 学 生 課 野 澄 (調理員)

学園事務局
(1) 新規採用
総 務 課 長 沢 亜 有 美 (主事補)
(2) 嘱託新任
澤 田 憲 宏 (主 事)

[昇 格]

酪農学園大学
教授 小 藤 修 二 尾 碓 亨
教授 小 佐 藤 元 一 尾 野 英
教授 丸 山 山 藤 伊 藤
教授 丸 山 山 藤 伊 藤 秀
教授 丸 山 山 藤 伊 藤 善
教授 丸 山 山 藤 伊 藤 真
学務部学務課長 加 藤 幸 枝 (学務部学務課主任主事)
就職部就職課長 佐々木 淳 (学生部学生課主任主事)

酪農学園大学短期大学部
教授 高 橋 一 子
助教授 岡 井 静 子
学園事務局
局長 田 中 義 則 (総務部総務課長)

[人事異動]

酪農学園大学
学務部学務課 浅 井 太 一 (教務部教務課)
教務部教務課 北 山 陽 (学務部学務課)
学園事務局
総務部総務課長 近 雅 宜 (就職部就職課長)

[所属変更]

酪農学園大学
酪農学 安 宅 一 夫 (短期大学部)
生命環境学科 井 上 博 紀 (獣医学科)

[役 職]

酪農学園大学長 大 谷 俊 昭
酪農学園大学短期大学部学長 大 谷 俊 昭
酪農学園大学宗教主任 山 口 博
酪農学園大学短期大学部宗教主任 山 口 博
以上(2005.4.1)

第56回獣医師国家試験結果('04年度)

	受験者数	合格者数	合格率	
本 学	新卒者	138	117	84.8%
	既卒者	13	5	38.5%
	計	151	122	80.8%
全 国	新卒者	1,065	961	90.2%
	既卒者	157	47	29.9%
	その他	1	0	0%
計	1,223	1,008	82.4%	

編集後記

4月に入り、新入生を迎えたこの時期は、キャンパス内にどこかソワソワした空気が流れているように思います。確かな目標を持っている人、これから自分のやりたいことを見つけようとしている人、卒業までに何か一つでもこの学園に残そうとしている人、各自がさまざまな思いを持って入学さ

れたと思います。そんな学生の皆さんから、今年はどんな話が聞けるかと思うと楽しみです。また、今年度から「酪農学園だより」は発行回数が5回になりますが、そういった学生たちの活動、熱意を一人でも多く紹介していけたらと思います。(0)

酪農学園だより

RAKUNO GAKUEN Vol.105
発行：学校法人酪農学園 2005.4.15

酪農学園大学/大学院/酪農学園大学短期大学部
とわの森三愛高等学校

編集：学園広報室

〒069-8501北海道江利市文京台緑町582
TEL(011)388-4158 FAX(011)388-4157
HPアドレス: http://www.rakuno.ac.jp/
Email:koho@rakuno.ac.jp